
僕とかぐや姫

くおんベアトリーチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とかぐや姫

【Nコード】

N1998Q

【作者名】

くおんベアトリーチェ

【あらすじ】

翁魅昇のガチャガチャ学園ライフ

プロローグ

「昇、隣に引越してきた子よ。仲良くしてあげてね」

「うんっ」

昇と呼ばれた少年は母に促され、少女の元へ駆け寄った。

「はじめまして。名前、なんていうの？」

「……………」

少女はハイトーンの無い目で昇を一瞥すると、ぷいと他所を向いてしまった。

しかし昇は、少女の目先に立つと手を差し出して満面の笑みで言った。

「僕と遊ぼうよっ」

少女はおそろるおそろる手を伸ばし、昇の手を掴んだ。

「あ……そぶ……？」

初めて聞いたことのように繰り返す少女に昇も少々驚いたが、すぐに笑顔に還る。

「うん、遊ぼう！」

二人は手を取り合い、駆け出して行った。

プロローグ（後書き）

初めての方、はじめまして。

他のコミュでもお世話になった方、久しぶりでございます。
くおんベアトリーチェです。

今回は主人公翁魅昇をはじめとして、個性を出していきたい作品です。

世界観こそ現実社会ですが、その中身は作者の頭の中同様混沌に満ちております。

最後までお付き合いいただければ幸いです。

一、天体観測

蟬の喧騒と夕日の眩しさが夏を思わせる午後七時。二人の男女が学校の裏にある小高い丘を登っていた。

「ねえ昇、まだー？」

「もう少しだ」

昇と呼ばれた少年は頬を伝う汗を手の甲で拭いながら、だるそうに答えた。

八月の上旬ということもあり、夕日夕方でも辺りはかなり熱い。昇は肩に円筒状のバッグを二つかけており、さらに体力を奪われているようだった。

「もう少しって、さっきからそればっかじゃん！」

そんな昇とは打って変わって、淡いピンクのキャミソールにホットパンツというラフな格好の少女は、ふて腐れて座り込んでしまった。

「あのなあ、美保。天体観測がしたいって言い出したのはお前だろうが」

「こんなに疲れると思わないもーん！」

美保と呼ばれた少女は、叫びながら丘の上に寝転んでしまった。昇も肩を落とす。

翁魅昇と橋田美保は幼なじみだった。幼なじみだからこそ遠慮の無さ、というものはあるだろうが、二人のそれははや小学生と面倒見のいい父親のようだった。

二人が登っている丘は二人の通う学校の敷地であり、本来は立ち入り禁止になっている。しかし今は夏休み中ということもあり、誰に見つかることもなく入ることができた。

二人の通う学校、私立浜平学園はここら一帯の高校を財力と学園長のコネによって吸収合併した、巨大な高校だ。県内唯一の高等学

校、という肩書きだけ聞くと県が栄えていないように思えるが、その逆だった。県内のありとあらゆる高校を吸収したため、その全校生徒数は五万を超える。そのため、数百台のコンピュータによる生徒の管理と教育が行われているが、県内各所に分校が立てられている。その中でも、昇と美保の通う校舎は中枢であり、その敷地面積は高等学校のものとは思えないほどであった。

「疲れたー！ 足いたーい！ 帰って昇ん家の冷し中華食べたーい！」

そして今は夏休み中。三年生の特別補習や部活以外で学校に来ているのはこの二人くらいだろう。

高校二年の昇としては存分に遊びたかったが、この幼なじみはそれを許さなかった。

「じゃあ帰るか？」

黙って美保の駄々を見下ろしていた昇だったが、美保の帰りたいたいという単語に反応して円筒状のバッグを下ろしながら聞いた。

「私は夏空の天体観測がしたいのー！」

「矛盾しまくりだろ……」

美保が動く様子がないので、仕方ないと思い昇もその場に座る。

「それで、なんで天体観測したいなんて言い出したんだ？」

美保が天体観測をしたいと言い出したのは昨日の朝だった。早朝から昇の部屋に押し入り、天体観測したいと騒ぎ立てたのを昇が渋々了承した。けれど、その理由は聞いても答えてくれなかった。

「そんなことよりさー、観月はもう来てるんじゃない？」

「さんざん時間かかることとしてたくせに……」

観月とは昇と美保と共に、今日天体観測をする予定である男子だ。二人のクラスメートであり、寡黙だが思考の幅が広く、何かと頼れる存在である。

「ほらほらー！ 早く行こうよー！」

美保は立ち上がると、昇の腕を引っ張った。昇は呆れ半分で立ち上がる。

「先に座り込んだのはお前なんだがな……」

昇はやれやれと首を振り、バッグを担ぎ直すと丘の上を目指して歩き出す。少し休んだからか、美保の足取りも軽く、さっきよりいいペースだ。

しばらく歩くとやがて開けた広場のような場所に着いた。ここが目的の場所である。

「よし、じゃあ美保、これ頼むぞ」

昇はバッグの片方を美保に渡した。もう片方のバッグを開けて望遠鏡やスタンドを取り出し、慣れた手つきで組み立て始める。

「えー！ なにこれめんどくさーい！」

一方の美保は、まるでやる気がないようにでバッグを放ってその場で寝転んでいる。

「観月お願い」

美保はバッグを隣に立っている少年——弓原観月に渡してゴロゴロと遊び始めた。

「って観月いたのか！」

昇は当たり前のように目の前のやり取りを眺めていたが、微妙に引っ掛かっていたことにツツコミを入れた。

「なによ昇、失礼ね。私達が着いた時にはいたじゃない」

「すまん、気付かなかった」

昇が謝罪すると、観月は右手を上げて「大丈夫だ」と言っているように思える表情になった。

観月は寡黙というより、もはや喋ることがない。初見の者は戸惑うだろうが、昇や美保のように長年つるんでいるとなんとなく言いたいことは分かってしまうものだ。

「よし、そろそろ暗くなってきたな」

昇は時計を確認すると、望遠鏡を覗きながらピントを合わせたりと準備を始めた。

「あ、一番星！」

美保が空を指差して声高に叫んだ。つられて昇と観月も空を見る。

「おい、一番星どころかもうかなり星が出てるぞ」

「あれよあれ！ 観月は見たでしょ？ あれが一番最初に光ったの！」

騒ぎ立てる美保を観月に任せ、昇は二人分の望遠鏡をセットし終えた。観月の分は観月がすでに自分でやってあった。

「でも、望遠鏡はいらなかったかもな」

昇が呟くと、聞こえていたのか観月が頷いた。

今三人がいるこの丘は、学校の校舎よりも頭一つ出ているくらい高い。小さな山と言ってもおかしくない高さだ。

今は夜間で学校には人がいなく、さらに学校の周りにはあまり街灯などが設置されていない。そのため、望遠鏡を使わずとも星空は綺麗に映った。

「ねーねー、あれは何座？」

美保が星の一群を指差しながら二人に聞いた。

「あれは射手座だな。たしか観月は射手座だよな？」

昇の問い掛けに観月は親指を立てながら頷いた。本人曰く、最近このポーズにはまったらしい。

「私は乙女座なんだけどー。乙女座どこどこー？」

「えーと……あるにはあるんだけどな」

昇は美保の方を向いて苦笑いした。辺りの暗さで昇の表情は見えにくいだろうが。

「あるなら教えなさいよー！ 早く早くー！」

美保が昇の肩を掴んでがたがたと揺さぶる。観月は素知らぬといった風で望遠鏡を覗いていた。

「いや、今日は満月だろ？ だから月が明るくて乙女座が微妙に見えないんだ」

「えー……」

昇の言葉を聞いて、美保は落胆した。

昇の言う通り、今日は満月だった。月の明かりが邪魔をして周辺の星はだいたい見づらくなっていた。

「それにしても、眩しいな」

昇は目を細めて月を眺めた。観月もそう思ったのか、同じように目を細める。

「ていうか今日の月、なんか明るいつてより……不気味な感じ……」
美保の言葉を聞いて、昇もそれに続く。

「ああ、何か不吉そうな雰囲気があるな」

そこで昇は肩を叩かれたことに気付いた。後ろを向くと、観月だった。

「どうした？」

観月は月を指差した。というよりもむしろ、観月の動きを視認できるほどに辺りは明るくなっていた。

「昇……月が……」

美保が少し怯えたように月を指し示す。昇は月を見上げ、絶句した。

「な……んだよ、これ」

昇が見上げた月は、光輪を纏い紫色に輝いていた。その姿はまさに異物であり、なにか災禍を予言するかのごとく不気味に輝いていた。

「ねえ、二人とも……帰ろうよお……」

美保が不安そうに二人の服の裾を引っ張った。昇と観月は目を合わせ、望遠鏡を片付けて帰り支度を済ませた。

「こんなに明るくなったら天体観測どころじゃないな」

ぼやいた昇の横で観月が首だけでコクコクと頷く。三人は校舎裏へと丘を下り始めた。

「あーあ。せっかく夏休みの貴重な時間使ったのに、これじゃ台なしよっ」

美保が不満をたれながら跳びはねるように駆け下りる。昇と観月も小走りで続く。

「おい美保、待てよっ。そんな走ったら転ぶぞ」

「だーいじょーぶ！ あたしを誰だと思ってるのよ！」

「幼なじみ」

「むう……つまんなーい」

こんなくだらない会話はいつものことだった。美保がおちやうけて昇が突っ込む。観月が冷静に傍観し、たまに暴走した昇を抑制する。

どこにでもあるごく普通の日常だったが、三人にとっては一番心地好い時間だった。

しばらく歩いていると、やっと校舎に近付いてきた。不意に美保が立ち止まって不思議そうな表情を浮かべた。

「どうした、美保？」

昇と観月は美保の顔を覗き込んで聞いた。美保は自分の気のせいとか、という心持ちで校舎を指差して言った。

「ねえねえ、校舎の中に誰かいらない？」

「はあ？ 今は夏休み中だし、この時間じゃ自習してる奴もいないだろ。校舎の戸締まりは完……」

完璧だ。昇がそう言うおうとした時だった。廊下を動く人影が過ぎった。観月の方を見るが、観月にも見えたらしい。

「ね！ いたでしょ？ あれ、泥棒じゃないかな？」

美保の何気ない言葉に二人とも考え込んでしまった。

確かに、ありえない話ではなかった。浜平学園の所持する土地の量、財産の量は県内の全高等学校のそれと言っても過言ではない。

「どうする？ 昇、観月」

美保は二人に聞いた。が、それはどうするか意見を求めたというよりも、自分への許可を求めているように感じられた。

「見ちゃったもんは捕まえるしかないだろ。な、観月？」

昇は美保と観月を交互に見てニヤリと笑った。観月も了承したのか、親指を立てて二人に合図をした。

「よし。じゃあ、意地でも泥棒を捕まえて成績アップに繋げないとねっ」

美保が満面の笑みで言ったが、昇はあからさまな呆れた表情を浮

かべた。観月もいたたまれない、といった感じで美保と目を合わせなかった。

「美保、お前最初からそれが原因だっただろ……」

「あれ、ばれちゃった？」

「いや『ばれちゃった？』じゃないから……」

昇は美保の行動の動機に完全に呆れていた。すると、観月が昇の肩を叩いて校舎の一角を指差した。

「ん？ あれは……さっきの人影っぽいな。よし、じゃあ二人とも準備はいいか？」

昇と観月は肩にかけた望遠鏡をその場に下ろし、肩を二、三回した。

「よし、行くぞっ」

昇の掛け声を引き金に、三人はいっせいに校舎目掛けて飛び出た。行った。

二、鬼づっこ

昇はひた走っていた。彼の前には美保と観月が走っている。三人とも部活には所属していないが、美保と観月は学年でも取り分け運動神経が良かった。

「泥棒は西棟にいたから、俺と美保は昇降口、観月は南棟から行くぞ」

浜平学園の構造は簡単に言って、カタカナの『コの字』をしている。ちょうど『コ』の隙間がある方が北に属し、昇降口である。そこから校舎は東棟、南棟、西棟と分けられる。さらに渡り廊下を隔てて四棟の講義室校舎が存在する。本校舎は職員室や資料室などが点在しているだけだった。

「泥棒だから手加減はいらないわよねー」

美保は楽しそうな表情を浮かべながら両手をワサワサと動かした。「殺さないようにな……」

昇は若干引きながらそう促した。観月も冷や汗をかきながら激しく頷いた。

「さすがにそんなことしないわよっ！」

「へいへい……。でも去年のこと忘れんなよ」

「あ、あははは……」

昇の何気ない一言に美保は苦笑いしてそっぽを向いた。

美保は中学校の頃から護身術として、合気道、柔道、空手など格闘技には端から手を出していた。その腕前は大人も舌を巻くほどである。

そして去年の出来事。美保は学校の帰り道、すっかり暗くなった時にナイフを持った不審者に襲われた。そして案の定その不審者は病院送りとなり、学校側からの示談で大事には届かなかった。しかし美保は過剰防衛として警察からかなり厳しい指導を受けていた。

「よし、ここから別れよう」

ちょうど西棟の正面に来たところで昇が告げた。二人ともそれに了承し、昇と美保、観月の二手に別れる。昇と美保は昇降口へ向かうために左へ、観月は南棟へ向かうために右へと駆け出した。

昇と美保は校舎の壁づたいに昇降口を目指して走っていた。今二人の右手にある校舎は職員室や資料室だけと言っても、端から端までは三百メートルはあった。

「ところでさ、昇」

昇のやや前方を走っている美保が顔を前へ向けたまま話しかけてきた。声の調子からして疲れてはなさそうだった。

「はあっ……なん……だ？」

一方の昇はと言うと、美保についていくのがやっとというばかりにバテていた。

「まったく……体力なさすぎ。それでさ、どうやって校舎に入るの？」

美保は昇がついて来れないと判断したのか、ゆっくりとペースを落として歩き始めた。昇も歩き始めて肩で息をしていたが、美保の質問に固まった。美保の顔が眉間にシワを寄せる。

「まさか……」

昇は美保と顔を合わせないように明後日の方向に顔をやって頬を掻いた。

「……ごめん」

「まったくもう……」

美保はぼやきながらポーチを取り出し、いくつかの鍵が付いた束を取り出した。

「それ、何だ？」

昇が不思議そうにながめて手を出すと、美保は鍵を引っ込めて得意そうな顔になった。

「これが生徒会室。こっちが職員室でこっちは……」

美保は一つ一つの鍵を持ち上げながらどれが何の鍵なのか説明し始めた。

「お前、なんでそんなモン持ってるんだよ……？」

昇は呆れ半分、驚嘆した表情で美保に聞いた。美保は鍵を揺らしながらさらに得意そうな顔になって言った。

「こないだ先生や先輩にパシられた時にいちいち鍵の使用許可取るの面倒だったから」

「勝手に合い鍵作ったと？」

「違うよー！ まあ、違うはないけど、違う……」

美保の言い方がよく分からなかったので、昇はさらにまくし立てた。美保はまあいっか、と呟いて説明し始めた。

「ウチの学校って教室無駄に多いじゃん？」

「まあ、そういう学校の造りじゃないとな」

浜平学園は本校舎だけでも約五十の教室が設けられている。その中に貯蔵された資料はもはや数えられないほどだった。

「だからさ、管理のために全部の部屋に鍵あるじゃん？」

美保の言う通り、中には表に出せない資料もあるため鍵等による管理は完璧だった。

「鍵使うには先生の使用許可が必要なんだけど、生徒会の仕事とかって資料室に何回も入るの。だから、何代も前の生徒会長が合い鍵を……」

「なんつー生徒会長だ……」

昇は美保の話を聞いて落胆した。まさか生徒会でそんなことが成されていたとは、誰も思わないだろうから。

ちなみに、美保は普段の姿こそおてんば娘と呼ぶに相応しいそれだったが、やることはキツチリやる奴だった。そのためなんだかんだで先生や先輩からの信頼は厚く、こうして生徒会の仕事を手伝わされることが少なくない。

「っと、着いたな」

昇と美保はものの五分とかかることなく昇降口に到着した。ガラ

ス越しに見る薄暗い校内は不気味な雰囲気醸し出していた。

「よし、開けるわよ」

美保が鍵の束をジャラジャラとさせながら扉の下に付いた鍵穴を探り始める。昇は誰かが来ても大丈夫なように辺りを見回していた。「改めてこうして見ると、やっぱデカイんだな」

昇は少し感心したように声を漏らした。いくら大規模と言っても、普段は人混みでごった返している玄関広場。人の気配が感じられないからか、昇はいつもよりも広く寂しいように感じていた。

「あれ？」

「開いたわよー」

昇は校門の影に何かが見えたような気がしたところで、美保に声をかけられて振り向く。

「あ、ああ……」

「さあ、捕まえるわよ！」

勇んで中に進む美保の後を追いつながら、昇はちらりと校門を振り返った。しかし、闇の中に異変は全く見られなかった。

「わー！ 暗くてなんかドキドキするわね！」

校内に入ってから数分。美保は普段と違う雰囲気を楽しんであちこちを見回っていた。泥棒は見つかっていない。

「おい、美保。そんな声出したら泥棒に見つかるぞ」

「大丈夫よー！ 昇は心配性すぎなの！」

昇の忠告も聞かずに美保は大声で答える。昇は半ば呆れながら美保の後を追った。

「しかし、不気味だな」

例の紫色の月のせいで、校内は紫色に染められていた。その光景は本当に不気味そのものであった。さらに校内に誰も居ないというのが、また一段と不気味さを増していた。

「ねえねえ昇、ちょっとこれ見てよー！」

いつの間にかどんどん先に進んでいた美保が、一つの部屋の前で昇を呼んだ。何かと、昇は足早に近付いた。

「どうしたんだ？」

「これよ、これ」

美保は少し屈んで、扉の鍵穴を指差した。昇も顔を近付けて鍵穴を見る。

「なんだこの傷跡？」

昇の言った通り、鍵穴には引っ搔いたような傷跡がいくつも付けられていた。まるで合わない鍵で無理矢理こじ開けしようとしたかのようだった。

「ね、この部屋にそんな大したもの入ってないのに」

「何の部屋だ？」

扉の上部に取り付けられた札を見ても、『第二十五資料室』とだけ書かれていた。

「ここはねー、名簿とか生徒会の議案書とか、あとは学校行事のポスターもあったかなあ」

美保は首を捻って、なんとか思い出したように言った。昇はそれを聞いた途端に思案顔になった。

「名簿やポスターはともかく、議案書には生徒会の出納も含まれる。さらに年間行事の情報も手に入れば、効率良く一番高い金額を手に入れられるということかもしれない」

昇がそう言うと、美保はさらに首を捻った。

「でも、生徒会の出納帳は学校とは別の口座だし、大した金額じゃないような……？」

美保がそんなことを言ったので、昇は余計に混乱してしまった。泥棒の狙いはもっと別のところなのではないかとまで考え始めていた。

「とりあえず、観月と合流しなくちゃな。行こう」

昇がそう言って廊下の先を見た時だった。月明かりで紫色に染まった廊下の角で、何かが動いているのを捉えた。昇は美保に言おう

としたが、美保の方が反応が早かった。

「待て待て待てー！」

「ちょっ、待てよ！」

美保がいきなり駆け出したので、慌てて昇も追う。美保が角を曲がり、昇もそのすぐ後に曲がる。

今二人が入った東棟の廊下はかなり長い。少し目を懲らすと、走っている人影を見て取ることができた。

「昇っ、早く！」

「だああっ、早すぎ！ 先行ってくれ！」

「まったく……っ」

美保のペースについて行けない昇はなんとかペースは上げているものの、美保を先に行かせることにした。

美保も昇がついて来れないと分かると、いつきにペースを上げて泥棒に追い縋る。瞬く間に背中に張り付き、捕まえようと手を伸ばした時だった。

「……………っ」

泥棒は素早いステップで身を後ろに投げた。美保の伸ばした腕が空を掻き、その腕が泥棒に掴まれる。

「嘘っ……」

そのまま泥棒が足一本を軸に時計回りに体を捻り、美保はその勢いで壁に叩き付けられてしまった。

「いったあ……」

美保は腰を打ったらしく、その場に座り込んだまま泥棒を睨みつけた。泥棒はそんな美保を無視して先に進もうとする。

「待てっ！」

やっと二人のもとに駆け付けた昇が泥棒に手を伸ばすが、泥棒に半身で避けられてしまう。昇は重心に引っ張られて前につんのめり、廊下を転げた。

「いっつつ……」

昇は首だけを泥棒の方へ向けた。紫色の月明かりに照らされてそ

の姿は曖昧に把握できた。思っていたよりも小柄ではあるが、立ち振る舞いは威厳あるそれであった。ローブのようなものを羽織っており、顔は確認することができない。

泥棒は二人を一瞥し、駆け足で昇降口の方へ向かった。

「待ちなさいよっ！ アンタ、こんなことしてただで済むと思わないでよっ！」

座ったままの美保が大声で泥棒に悪態をつく。すると、泥棒は美保のもとへ歩み寄り、美保に手を伸ばす。

「なっ、何よ！ 私とやるっていうの！？」

美保は腕をぶんぶん回して伸ばされた手を防ぐ。が、すぐに腕を掴まれてしまった。

「ちよつと……いやっ……」

「美保！」

その刹那――

――ガシャアアン

「……っ！」

美保の頭上の窓ガラスが割れ、観月が飛び込んできた。そのまま泥棒に飛び蹴りを喰らわせる。

「観月！」

泥棒は蹴られた衝撃で数歩後ろに下がり、美保との間に観月が立つ形になった。その姿は普段の落ち着いた物腰とは打って変わってとても頼りがいのある雰囲気だった。

「ありがとう、観月」

少し呆気にと取られていた美保が我に返ってお礼を言った。観月はちらりと振り向くと、微笑を浮かべて頷いた。と、その時泥棒がゆっくりと立ち上がり、観月を一瞥した。そのまま沈黙が続く。

「……………」

自然と昇と美保も言葉を失ってしまう。まるで世界が止まってし

まったかのように辺りは静かだった。

「っ！」

しかしその均衡を破ったのは泥棒だった。ローブを翻し、一直線に廊下を走っていく。泥棒の姿が闇に消えた辺りで、観月がはっとして追い掛けた。

その場に残された二人は、それこそ呆氣に取られてしまっていた。

「なんだったんだろうな」

「逃げるくらいならなんで向かって来たのよ……」

昇は美保が握りこぶしをギリギリとさせているのに気付いた。慌てて美保をなだめようとする。

「ま、まあまあ。怪我も無かったし、いいじゃんか」

「むー……」

美保はどうしても泥棒を捕まえたかったらしく、かなりふて腐れていた。

二人がしばらく話していると、観月が歩いて帰ってきた。その様子から察するに、逃げられたらしい。

「お疲れ、観月。泥棒は逃げたのか？」

観月は少し申し訳なさそうに首を縦に振った。

「そんな気にすんなって。何も盗られなかったらそれでいいじゃん」

「そうよ、観月。それに、さっきは助かったし」

二人にそう言われて、観月は感謝の念を浮かべた表情になった。

「とりあえず、今日は帰るとするか」

「そうね、来週からは学校だし」

三人は施錠を確認してから、学校を後にした。三人の背を照らす紫色の月明かりが、三人の未来を脅かす影になりつつあった。

三、事の兆し

夏の朝のムシムシとする熱気と蟬の喧騒で翁魅昇は夢の世界から現実に誘われた。

上体を起こし、枕元にある目覚まし時計を確認する。時計が指す時刻は八時四十分。アラームは押した覚えは無いが、おそらく寝ぼけたまま止めたのだろう。

ベッドから出て軽く身体を伸ばす。ポキポキと気持ち良い音が鳴り、だんだんと意識を覚醒させる。

衣装ダンスを開け、今日の予定を確認しながら着る服を選び始めた時だった。

「……………」

昇の中ではある一つの疑惑が浮かんでいた。昇はその疑惑を確認するため、自分の部屋の窓から隣の家のように真向かいにある部屋を見る。

いつもは昼過ぎまでピンクの遮光カーテンで閉ざされているその部屋は、今まさにカーテンが開かれその部屋に人の姿は無かった。

「やばい……」

昇は頭を抱えた。今日は八月三十一日。私立浜平学園の始業式当日であった。

美保は休日には昼過ぎまで平気で寝ているが、今は居ない。答えは簡単。美保はなぜか無遅刻無欠席に異様にこだわっているからだった。

「声かけてくれたっていいだろうが……」

そんな文句をぶつぶつ言いながらぱっと支度を済ませ、昇は学校へと走って向かった。

自宅から走ることおよそ十分。昇は校門をくぐり、肩を上下させ

ながらそそくさと下駄箱へ向かった。

自然と、一週間前のことが思い出される。あの後三人は学校警備員へ起こったことを話し、それからは二十四時間体制での見回り警備が就くことになった。ちなみに美保の合い鍵で入ったことは泥棒が開けた窓から入ったことに、観月が割ったガラスは泥棒と揉み合ったため、ということにしておいた。

ちなみに、あの翌日から紫色の月は現れなかった。学者の間ではなにやら難しい議論が交わされているらしく、世間に真相が伝わるのはまだまだ先になりそうだった。

「お、まだ始業式は始まってないみたいだな」

コの字型の本校舎東棟から出ている渡り廊下を歩きながら、昇は呟いた。

昇の歩く渡り廊下のちょうど真横に設置された体育館の小窓から見える中では、先生や生徒会役員が始業式の準備をしていた。中には美保の姿もかいま見えた。

「なんだ。だからあいつ早めに出たのか」

昇は独り言で話をまとめ、自分の教室へと歩みを進めた。

『飯島ー』

『はい』

『五十嵐ー』

『へーい』

昇が教室の後ろ側のドアを少し開けて中を覗くと、出欠を取っている最中だった。今呼んでいるのは『い』なのでもうすぐ昇の番である。

『上原ー』

『はいはい』

『遠藤ー』
『ういっす』

いよいよ次は昇の呼ばれる番になった。昇は腹を括り、後ろ側のドアからこっそり教室に入った。先生が名簿に印をつける一瞬の隙をついて、素早く席に着いた。これで安心だと思い、先生の点呼を待つ。

「翁魅昇は欠席か」

「……先生、います」

「遅刻……と」

「はい……」

新学期早々やらかしてしまったことを後悔しながら、昇は席に座り直した。それから出欠確認を暇そうに過ごしていると、隣の席の女子が小声で話しかけてきた。

「おはよう、翁魅君」

「ああ。おはよう、委員長」

委員長と呼ばれた女子はニコリと微笑むと、後ろで纏められた黒く長い艶やかな髪を指先で軽くすいた。

彼女は呼ばれた通り昇のクラスでクラス委員長を務めている女子、倉月由美。身長こそ小さいが、出るところは出ている体型に艶やかな長い黒髪、さらに整った顔立ちが加わり男子からは絶大な人気がある。

「翁魅君が遅刻なんて、珍しいこともあるのね」

由美はクスクスと笑いながらそんなことを言ってきた。彼女が言う通り、昇もなんだかんだで無遅刻無欠席をしていた。その裏には美保が毎朝無理矢理起こしていたというものがあつたが、昇はその点では美保に感謝していた。

由美の言葉に愛想笑いで答えていると、由美は急に声を潜めて聞いてきた。

「夏休み中に、何かあったの……?」

「……っ！」

一瞬、昇は息が詰まったような感覚になった。三人で話し合い、あのことは内緒にすると決めていただけに、由美の一言は衝撃が大きかった。

「な、なんでいきなりそんなことを……？」

昇は困惑しながらそんな聞き方をしてしまった。してから、後悔した。

「そんなに慌てるってことは、やっぱり何かあったのね？」

由美の目の奥が鋭く輝き、昇の双眸を捕らえた。これは何か探ってくるなど、昇は本能的に理解できた。しかし、咄嗟にごまかそうと思って試行錯誤するがうまくいい訳が見つからなかった。

「どうなの？」

由美が口の端をかすかに吊り上げて追求してくる。昇はしどろもどろになりながらなんとかやり過ごそうと考えを巡らせたが、何も思いつかない。

「相手は誰なの？」

「……え？」

昇は予想外のことを聞かれて思わず素っ頓狂な声を出してしまった。それを聞いて、由美がクスクスと笑う。

「あら、私のはやとちりだったみたいね」

由美の言葉から、昇は由美が昇に彼女ができたものと考えていたことを理解した。そんなに疑わずとも、自分に彼女ができるわけではないと思った昇は自分で虚しくなって落胆した。

「……だ。よし、じゃあ始業式始まるから体育館に移動ー」

気付くと、担任の話はすでに終わっていたらしく、始業式のために体育館への移動を促していた。

昇も席を立ち上がり、教室の出口に向かう。そこで見慣れた顔と合流する。

「よお、観月」

昇が声をかけると、観月は目で挨拶をした。その後はたわいもな

い話をしながら体育館へと歩き、入り口で手伝いを終えた美保とも合流。

「おはよー。今日もあつついわねー」

美保が制服の胸元に指をかけてパタパタと中に風を送る。それを見て、昇と観月は気まずそうに顔を逸らした。

「んー？ なんですか、二人とも。あたしの魅力に赤面硬直ですか？」

「ちよっ、違っ……」

美保が胸を寄せて二人に迫ってくる。昇は、コイツ本当に女か？なんてことを思ったが、それも恥ずかしさで吹き飛ばされてしまった。

観月は女性に弱いというか、そういうところがあるので早々にリタイア。その場でうずくまって事の成り行きを見守っていた。

「橋田さん？」

誰かが美保を呼んだかと思うと、美保の動きも治まっていた。美保の肩を越えた先にいたのは、由美だった。

「なによー、いいんちよ。今いーとこなのに」

美保は由美に抑制されたのが気に喰わなかったのか、口を尖らせた。それを見て、由美は大きくため息をつく。

「いいとこって、二人とも随分参ってるじゃない。止めてあげなさいよ」

「ちえー。いいんちよのけちんぼー」

「そういう問題じゃないと思うんだけど……」

さすがの由美も美保の破天荒ぶりにはついていけなかったらしく、諦めて自分の所定の位置へと戻っていった。

「ほら、俺達も行こうぜ」

昇が声をかけると、観月がはっと我に返って立ち上がった。美保も口を尖らせたままだがすごすごとついて来た。

「まだ夏だな……」

体育館の中を照らす太陽の光に目を細めながら、昇はひとりでに

そう呟いていた。

暑くて退屈な始業式を終えて今日は学校は終わり。校内では部活に勤しむ者や、友達の宿題を写す者が見れる。

昇達は天気もいいということで、屋上で昼食を取ることにしていた。

浜平学園の屋上は基本的に本校舎にのみ設置されている。ただその面積はかなり大きく、中央にはバレーコート、南側にはバスケットコートが設けられている。北側のみがフリースペースとなっているが、それだけでもかなりの広さだった。「結局さあ、あの泥棒って捕まったのか？」

昇がパックのジュースを吸いながら二人に聞いた。二人とも分かっていなかったらしく、揃って首を傾げた。

「捕まっていないにしても、もうあたし達の出る幕じゃないでしょ？」
珍しく正論を言う美保に驚いて、昇はパックのジュースを落としそうになった。観月も不思議そうに美保を見る。

「お前、そんなキャラだったか？」

「なによ、昇。むしろ私ってどんなキャラよ」

「なんつーか、お礼参りっていうのか……？」

「そんなことしないわよっ」

昇の一言に美保が吠えた。意外に怒鳴られて、昇は苦笑いをして美保をなだめた。

「でもさ、あのお前があそこまでやられて悔しくないのかよ？」

「うっ……。それは、まあ……あるけど……」

昇がこぼした一言が凶星だったのか、美保はしどろもどろになって答えた。

「あの感じからするとまた来るんじゃないのか？」

「この学校に？ まさかそんなわけ……」

美保も観月もありえないという表情をしたが、昇は何か引っかけかっていた。

「じゃあさ、今日の夜学校に来てみる？」

美保の意外な提案に、また昇と観月は驚いた。けれど、すぐに楽しそうな表情になる。

「いいじゃねーか、たまにはそういうのも」

「あれ、本気？」

美保は冗談で言ったようだったが、昇も観月もすっかりやる気になった。

「なんだよ、美保。お前は来ないのか？ 観月はもちろん来るだろ？」

昇の質問に観月は親指を立てて答えた。それを見て昇は満足そうに頷く。そしてこれみよがしに美保を見た。

「どうする？」

美保は少し考えて、吹っ切れたように答えた。

「私も行くわよっ。あの泥棒に一泡吹かせるんだからっ」

その勢いに昇も少し気圧されたが、すぐに事の次第を話し始めた。

「よし、じゃあ今夜の九時に昇降口集合だ。どっかの窓は俺が開けとくよ」

二人ともそれに頷き、その時は昼食を終えてそのままお流れになった。

四、事の初め

本校舎の一画に設けられた大会議室。時計の針は八時半を指しており、月明かりがうつすらと広い部屋を照らしている。そこに彼らは『居』た。

「首尾はどうだ？」

壁一面に備え付けられたホワイトボードを背に、少し年配の男性が口を開いた。その問いに、入り口近くの席に座った男が答える。

「特定は済んでおります。あとは声をかけるだけかと」

年配の男はそれを聞くと嬉しそうに口元を歪め、小さく鼻を鳴らした。そして椅子に深く座り直すと、落着きの無いように指先でボールペンを遊び始めた。

「そうかそうか……」

男はただただ嬉しそうにそう呟くだけで、周りもそれを見守っていた。

すると、今度は窓際の席に座った女が口を開いた。

「その件ですが、今宵中に済みそうです」

「なに……？」

ざわざわと周りが疑問の声をこぼす。男はゆっくりと女を見ると、目だけで詳しい説明を促した。

女はそれを待っていたかのように小さな機械——ボイスレコーダーを取り出すと、とある会話を再生した。途端に、男は笑い出す。

「くっ……くくくっ……。はっはっはっはっは！」

それを引き金に周りの者も含み笑いから高らかに笑う者まで現れる。女は自分の功績に満足したような笑みを浮かべると、静かに腰を下ろした。

時計は、そろそろ九時を指そうとしていた。

私立浜平学園の昇降口。今時計の針は九時を指そうとしており、

日は沈んでいるとはいえ夏の暑さがまだ残る。

その昇降口に、翁魅昇は一人で突っ立っていた。

「あいつらまだか……？」

昼間は九時に昇降口集合ということで解散だったが、もう少しきちんと事の次第を決めておくべきだったと昇は少し反省していた。

「おっ、来たか」

五分ほど経ってから、昇は遠くからこちらに歩いてくる姿を見つけて、声を漏らした。

「やつ。さっきぶりー」

美保と観月が揃って登場する。美保は相変わらずのテンションの高さだった。

「遅刻だぞ。ほら、さっさと行くぞ」

昇は二人にそうとだけ言うのと、帰る前に開けておいた窓へ向かうとした。そんな昇に美保が話しかけた。

「ねえ昇。あの事件以来、学校には常勤の警備員が増えたんだよね？」

「ああ、そうだな」

美保の言わんとしていることが分からないのか、昇はそんな生返事をした。

「じゃあさ、窓開いてたら閉められちゃうんじゃない？」

「……………」

「えっ！？　なんかごめん！？」

昇はそんなことすっかり忘れていたらしく、頭を抱えてしまった。

「うわー……マジで忘れてたよそんなこと……」

「まあ私も来る途中に気付いたんだけどね」

美保はそれでも少し申し訳なさそうに昇をフォローした。そして、ポケットから例の鍵束を取り出した。

「とりあえず、これがあるから大丈夫でしょ」

「……そうだな」

昇は力無くそう答えると、観月の手を借りてやっと立ち上がった。

三人は昇降口から校舎に入ると、手始めに先週泥棒と遭遇した本校舎北棟に向かった。

「しかしこの街もだいぶ変わったよな」

雑談をしているうちに、話題は三人の思い出話に変わっていった。

「私は小さい頃のこととはあんまり覚えてないなあ」

「俺と観月は幼稚園の頃から一緒だもん。美保ってたしか、引っ越してこなかったか？」

「うーん……そうだった？」

昇の問い掛けに美保は首を捻って悩んだ。その様子を昇は不思議そうに眺めた。

「覚えてないのか？」

「小学校に上がる頃はたしかここにいた気がするんだけどなあ……」
美保はどうしても思い出せない、といった表情でさらに困惑していた。

「俺もあんまり覚えてないけど、小学校に上がる前だった気がするな」
昇が言うと、観月が親指を立てて例のポーズをした。これは『その通り』という意で取れるだろう。

「そうだった？」

「ああ、昔の美保は仏頂面だったよな」

笑いながら昇が言う。観月も普段のクールな表情の口元を緩めた。美保だけが、昔の話についていけない疎外感をうっすら感じていた。

「あ、ちょっと待って」

しばらく歩いていると、美保が二人の歩みを止めた。何かと二人は美保を見た。

「どうしたんだ、美保」

「うん、この部屋」

美保は一つの教室——というよりも資料室の前に立ってその扉を示した。

「この前、鍵穴に変な跡があった部屋か」

昇が思い出したように言うと、美保がこくりと頷いた。観月が顔で説明を訴えてきたので、昇が答えてやる。

「ほら、一週間前に学校に来た時なんだけどな。この資料室の扉の鍵穴に、変にこじ開けようとした跡があったんだよ」

観月が言われて鍵穴を見ると、たしかにそこには不自然な傷跡ができていた。

「しかし、この部屋に用なんてあるのか？ 名簿とかそんなくらいなんだろう？」

昇がいまいち納得ができないといった様子で美保に聞く。美保の方も苦笑いで答える。

「まあね。でも、本当に泥棒が付けた傷か分からないし」 たしかにな、と呟いて昇は押し黙ってしまった。けれど、これほどまでに不自然な傷の付き方も珍しいのが事実だった。

「これはまるで、合わない鍵を無理矢理差し込もうとした傷だよな……」

「なによ、昇。犯人が学校関係者だって言いたいのか？」

美保がうたぐるような表情で昇の顔を覗き込んだ。しかし昇は少し考えて顔を上げた。

「いや、俺の思い違いだな」

泥棒を探すぞ、と言って歩き出した昇の裾を、観月が掴んだ。昇は振り返って不思議そうな表情を浮かべた。

「どうした、観月？」

昇が聞くと、観月はゆっくりと窓を指差した。それに従い、昇と美保は窓の方を見て驚愕した。

「えっ……」

「またか……」

そこにあっただのは、一週間前にも見た紫色に輝く月だった。以前と同じく、禍々しい雰囲気伝わってくる。

昇がふと隣に立っている美保を見ると、彼女は今にも気が狂って

しまいそうな何とも言えない表情になって月を凝視していた。

「おいっ、美保！ 大丈夫なのか？」

「……っ。え、ああ……大丈夫よ、大丈夫」

昇の声で我に返った美保は、何やら神妙な顔をして考え込んでしまった。昇はわけがわからず観月の方を見るが、観月は無表情——いつものような無表情ではなく、強張っているようにも見える無表情のまま月を見つめていた。

なんだか二人の様子がおかしいことに違和感を覚える昇だったが、考えすぎだろうと気持ちをもとの目的に切り替えた。

「さあ、行こうぜ」

昇の声に反応して、二人ともそれでも何か考え込んだ表情で歩き出した。

しばらく校舎内を歩き回り、三人は本校舎屋上に来ていた。紫色に照らされたそこは不気味な雰囲気で溢れていたが、立ち位置によつては校舎内をうろつく影を見つけるのに絶好の場所であった。

「話は戻るけどよ、観月とはどうやって知り合ったんだっけか？」

昇が聞くと、首を傾げる観月の代わりに美保が答えた。

「中学一年生の時に、私と昇は違うクラスだったじゃない？ だから知らないとは思うけど、私が観月と友達になって、それから昇ともつるむようになったのよ」

「あー……そうだったか」

昇も漠然としか覚えていなかったが、言われればそんな気がしなくもなかった。

「俺の記憶だと迷惑そうな顔した観月を無理矢理美保が連れて来た気もするけどな」

「あれ……そうだったけ？」

「忘れてんじゃねーか」

昇の言葉に、観月も苦笑いで頷く。出会った頃は、こんなに表情

が分かるほどはつきりとは変わっていなかった。そう考えると、自分達は随分と打ち解けている。昇は声には出さなかったがそんなことを思った。

しかし、観月も美保も同じことを考えていたようで、三人の視線が交わるなり笑い出してしまった。

「ははっ。来年はもう受験だなあ……」

「今みたいに馬鹿やってる暇はないわよ？」

美保が嫌な笑みを浮かべて昇に言うと、観月もその隣でコクコクと頷いた。

「ちえっ、頭いい奴らはいいな。少しは友達の心配くらいしてくれよ」

「心配してるからこそ言っておいてるんじゃない」

「へいへーい」

お前はお母さんかよ、と昇がぼやくとまた笑いが起こった。きっと、自分達は最高の仲間に巡り会えたんじゃないだろうか。そして、この絆が消えることはないのだろう。

そんな思いが昇の中で膨らむ。なんだか照れ臭くなった昇は、無理矢理話題を変えた。

「しかし、泥棒の奴なかなか来ないなあ」

転落防止用の金網まで歩み寄って、校舎を見回しながら言う。二人も昇のもとまで来て校舎を見回すが、やはりそれらしい影はなかった。

「それにしてもさ、なんか変じゃない？」

「変って？」

美保が突拍子もなくそんなことを言うので、昇は弾かれたように聞き返した。

「ほら、私達が先週のこと話してから警備員は常勤になったでしょ？でも、今屋上に来るまで一回も警備員に会わなかったわよね」

「そういえば……。でもさ、偶然会わなかっただけじゃないのか？」

昇がそう言うと、観月に肩を叩かれた。観月の方を向くと、観月

は校舎を指差した。

「あ、そうか。警備員が居れば、懐中電灯の明かりくらいはあるはずだよな」

昇が気付いてそう言うと、観月は満足したように頷いた。

「なんか起こったのか？」

昇がそう呟くと、美保と観月も一緒に思案し始めた。しかし、考えるほどに分からなくなってくる。

すると、昇はまた観月に肩を叩かれた。

「今度はどうした？」

すっかり緊張が解けたのか、いつもの軽い調子で聞く昇に、観月は静かに、美保にも聞こえるように初めてその重い口を開いて伝えた。

「……………居た」

五、事の真相

昇と美保は金網にしがみついて観月の示す方向——南棟を見た。

観月の言う通り、そこにはローブに身を包んだ不審者の姿があった。

そして何より二人が驚いた事態があった。

「観月、喋ったのか？」

「なんで今まで黙って……」

二人が問いたただそうとしたところで観月は歩き出してしまった。

「とりあえず、まずは泥棒のことだな」

「……そうね」

三人は泥棒に存在を悟られないように南棟へと向かった。

紫色に照らされた校舎内をしばらく進み、三人は廊下の先に泥棒の姿を見つけた。

三人がいるのは南棟の二階にある廊下へ入る角。泥棒は何かを探すかのように辺りを見回しながら廊下を階段の方へと歩いていた。

「ここからどうする？」

昇が小声で二人に聞く。二人は少しだけ思考を巡らせ、やがて美保が答えた。

「じゃあ、私と昇が一旦下の階に下りてから回り込んで、そこから挟み撃ちは？」

美保の提案に昇と観月は顔を合わせてから頷いた。そこで、昇が突然口を開いた。

「そういえば、なんで俺と美保なんだ？」

「それは……プライゼロになるから？」

「……そーかい」

聞いた俺が間違っていた、とでも言わんばかりに落ち込む昇の横では、観月が呆れたように肩を竦めていた。

「と、とにかくっ。やるからには成功させるわよ」

美保の締めで会話は打ち切られ、美保と昇は階段を下るために廊下を泥棒とは逆の方向へと進んで行った。

「でも、驚いたな」

「何が？」

声を潜めながら話しかけてきた昇に、美保も声を潜めて答える。

「観月がさ、喋ってるの見たことないから」

昇がそう言うと、美保は特に気に留める様子もなくさらりと答えた。

「ああ、昇は見たことなかったんだ」

あまりに当たり前のように言うので、昇は少し上擦った声で聞いてしまった。

「『昇は』ってことは、美保は見たことあるのか？」

「うん。でも、かなり前のことだよ？　だからさっきは久しぶりすぎて驚いたけど」

美保は楽しそうに笑った。なんだか昇は、二人と自分の間に見えない壁を突き付けられた気がして一瞬眉をひそめてしまった。

「よし、階段に着いた。じゃあ泥棒捕まえるよっ」

楽しそうに階段をゆっくりと、敵のアジトに侵入したスパイを意識したような素振りです上っていく美保の後ろ姿を見ながら、昇は複雑な感情に苛まれてしまった。

「なんだろうな……これ」

壁に背を預けながら額に手を当てて、独り呟く。

以前は一度もこんなことはなかった。初めて感じたのはいつだったろうか。意識したのはさっきだ。もしかしたら昔から持っていたのか。分からなくなる。もしかすると自分は……。

「昇ー？　何してんのー？」

階段の上から美保に話しかけられてハツとする。頬を二、三叩い

て意識を前に向けた。

「なんでもない。すぐ行くから待ってろ」

少し語尾が強くなってしまったが、下を向いて階段を駆け上がり何事もなかったように美保の隣に立つ。

「よし、じゃあ行くよっ」

美保の合図をきっかけに、二人で廊下の角から飛び出す。泥棒はまだ、二人の存在には気付いていない。

「……………!」

角から泥棒の様子を監視していた観月は、向こう側の角から美保と昇が飛び出すのを確認した。

泥棒は今扉に鍵を宛てがって正しい鍵を選別している途中で、二人の存在に気付いてはいなかった。

そしてふいに、二人の存在に気付くと作業を中断してこちらにやってきた。ここまで計算通り。あとは、観月がいかにな泥棒を足止めできるかだった。

美保に無理矢理友達にされた日、またもや美保に無理矢理空手を習わされた。そして最終的には截拳道もやらされた。ここで自分の器用さが嫌になる。一月あまりで大人に匹敵する実力を身につけたからに、たまに美保の組み手に付き合わされるのである。

そう考えていると、泥棒が自分の間合いにまで近付いてきていた。

「……………っ」

泥棒が走りながら拳を突き出してきたので、右手で小さく払い上げて胸元を開ける。そこに身を捻るように左手で掌底を入れる。

「……………!?!」

しかし泥棒もそれを読んでいたのか、左腕に遮られる。さらに左腕を返されて左手を掴まれると、一気に引き寄せられて右肘のカウンターを腹部に受けてしまった。力が入らず、その場に膝を着く。

「観月!」

やっと追いついた昇達を一瞥すると、泥棒はロープを翻して走り去った。

「追うぞ……！」

観月は膝が震えていたが、なんとか立ち上がり声を搾り出した。昇と美保はそれを見て、黙って頷いた。

「よし、行こう！」

三人は泥棒の後を追うように下り階段に入ってしまった。

南棟一階の廊下に入ると、泥棒の姿は体育館へ続く廊下へと消えて行った。三人はただひたすらその後ろ姿を追って走っていた。

「昇っ……もっと速く走れないのっ……？」

美保がじれったそうに昇に話しかける。昇も二人について行くのが精一杯で、やっとのことで声を絞り出した。

「待っ……これっ……限っ界……っ」

「あーもうっ」

美保は我慢ならないといった様子で、おもむろに昇の手を掴んだ。昇は何が起きたのかと一瞬身構えたが、状況を理解すると美保の顔を見た。

「これなら少しは楽になるでしょっ」

美保は昇の顔を見ようともしないで手を引いてペースを上げはじめた。その隣で観月が呆れ顔になっていたのを昇は理解できなかったが。

「観月っ……どうっ……した……んだ？」

昇は息が上がって喋りにくかったが、観月の表情がどうしても気になったのでつい聞いてしまった。

「……若気の至り」

観月は口角を僅かに上げてそうとだけ答えると、また前を向いてしまった。

「あっ……っ！」

突然、美保が立ち止まって大声を出した。何事かと昇と観月が顔を見合わせると、美保は恐る恐る口を開いた。

「泥棒、見失っちゃった」

美保が力無く前方を指差してそう言うので、昇と観月もその差し示された方を見る。確かに、先程まで自分達が追っていた背中はどこにも無かった。

「こりゃあ……逃げられるかもしれないな」

昇が独り言のようにそう言った時だった。美保が先程とは打って変わって上擦ったような明るい声を上げた。

「あれっ……！」

美保はさっきと同じ方を指差しているようだった。二人は同じようにその先を目で追った。その先には……

「あら、三人とも揃ってどうしたの？」

昇達のクラスの委員長を務めている、倉月由美その人であった。

「ああ、いや。ちょっとね。ところでさ、委員長、誰か怪しい奴を見かけなかったかな？」

「怪しい奴……？」

昇が言うと、由美は顎に手をあてて思考を巡らせる動作を取った。途端に、昇の視界が由美から天井へと変わった。そしてその鼻先を、何かがものすごい速さで掠めた。

「え……？」

気がつくと、昇は地面に背中から転がっていた。何が起こったのかと首を持ち上げると、自分に被さるように倒れている観月と、右手を振り抜いた格好のままこちらをじっと見ている由美が見えた。

「この……っ！」

美保が昇を跨いで由美との間に割って入り、中段蹴りを入れようと足を振り上げた。

「……っ」

しかし、その足は観月によって止められてしまった。

「観月、どうして……！ 由美が泥棒なのよ！？」

「……………」

観月は何も言わず、さらに美保と由美の間に入った。しばらくの沈黙が辺りを包む。

「その様子だと、何も話してないみたいね……」

その静寂を破ったのは由美だった。昇と美保は首を傾げていたが、観月だけはその言葉の意味が分かったようだった。

「黙れ……っ」

威圧するように由美を睨みつける観月。こんな姿は初めて見たのか、二人とも緊張の面持ちで観月を見ていた。

「ちようどいい機会だし、私から話すわ」

由美は一步下がって窓の方を見ると、どこか怪しげで妖艶な笑みを浮かべて紫色に輝く月を見つめた。

「あの月は、いわばサインなのよ」

「サイン……？」

美保が確認するように復唱した。観月も腹を括ったかのように黙って事の成り行きを見守っている。

「五十年に一度だけ、月と地球が繋がる日があるの。もちろん、公にも裏にも、知っている地球人は居ないわ。あの光はそのサインを意味するの」

「月と地球が繋がる……？」

「地球人て……」

昇も美保も、あまりの話のスケールの大きさに度肝を抜かれていた。ただ一人、観月だけが由美の言葉を静かに待った。

「地球は、言うなれば月の民の牢獄なの。月で罪を犯した者は地球へと強制転移させられ、五十年の懲役を課せられるわ」

由美は窓に歩み寄り、今度はどこか物寂しげな表情を浮かべながら言った。

「その話が、泥棒と何の関係があるんだよ……？」

昇は由美の話が一旦区切れを迎えたと解釈すると、気になったことを聞いた。すると由美は、少し驚いた表情を浮かべたが、すぐに

ニヤリとした。

「まだ分らないの？ 翁魅君鈍いのね……」

いつもと変わらない笑顔。しかし、その裏には何かとてつもなく黒いものを感じて仕方がなかった昇は一瞬たじろいだ。

「それから、泥棒っていうのはやめて欲しいな。私はそれでも看守長よ？」

「は……？」

昇は意味が分からず素っ頓狂な声を漏らしてしまった。

「そこに居る月の罪人、華紅夜玲子を迎えに来たの」

由美はそう言うとおもむろに美保を指差した。当の美保は、わけが分からないといった様子で首を傾げていた。

「今まで監視ご苦労様、弓原一級看守官」

由美はそんな様子の美保を尻目に、観月に微笑みかけながらそんなことを言った。昇が驚きを隠せずに観月を見る。

「観月……？」

「一つ言っておくわ。ここに居る四人の中、地球で生まれたのはあなただけよ、翁魅君」

「……っ！」

昇はわけが分からず、その場に膝を着いてしまった。美保は呆然と立ち尽くすばかりで、観月も苦々しげに唇を噛み締めていた。

六、事の絶望

再び四人を長い沈黙が包み込んだ。昇は膝を着いたままで、その正面で微笑む由美とそれを憎々しげに見る観月。そして困惑顔を浮かべた美保。その長い沈黙を破ったのは、意外にも美保だった。

「華紅夜玲子^{かぐやれいこ}って誰よ……。私は真正正銘の地球で育った人間よ！」
由美に向かって大声をあげる。一方の由美は、肩を竦めて不敵に鼻を鳴らした。

「華紅夜、分からないのも無理ないわ。地球に送られた者は記憶を消される。でも、安心なさい」

由美は今度こそ静かに微笑むと、次の言葉を紡いだ。

「五十年の期限が来れば、あなたは記憶をすっかり取り戻すことになるから」

「え……」

美保はさらに困惑顔を歪めた。自分は地球で生まれたただの人間ではないのか。月でどんな犯罪を犯してしまったのか。疑問は次々と浮かんでくる。しかし、そんな美保の思考も由美の言葉に打ち壊された。

「その代わり、地球での記憶は全て消えるわ」

「……っ！」

一瞬、美保だけでなく昇の肩も跳ね上がった。観月は唇を噛み締め、拳をぎゅっと握っていた。

「美保は……」

「……？」

突然、黙ったままでいた昇が口を開いた。由美は改めて昇に向き直ると、昇の言葉待った。

「美保は、どんな罪を犯したんだ……？」

今の昇には、その質問が精一杯だった。もっといろいろと聞きたいことはあるのに、本能に邪魔をされて言葉を紡ぐことができない

でいる。

「あなたには関係ないわ」

しかし、その質問すら由美にばっさり切り捨てられてしまった。
「邪魔するつもりかしら？」

由美は口の端をいやらしく吊り上げ、目だけを動かして観月の方を見た。

「うるさい……っ」

観月はキッと由美を睨みつけたが、その行動が肯定を示しているようであった。

「そう……。でもね、華紅夜は百五十年の刑期を終えようとしているの。故郷に帰る邪魔立てを、どうしてあなた達が必要があるの？」

「っ………！」

由美の言うことは尤もだった。昇も観月も、それ以上は何も言うことができなかった。

「……ちょっと待ってよ」

今までその口を閉ざしていた美保が、途端に言葉を搾り出した。

「私は物心ついた頃にこっちに引っ越してきて、ちゃんと成長もしてる！ それなのに、百五十年も地球に居たわけじゃないじゃない！」

「え……」

そこで、声を漏らしたのは昇だった。昇は膝立ちから普通に立ち上がると、美保の方を振り返った。

「地球に居る期間は、五十年じゃないのか？　なんで百五十年なんだよ？」

由美を見ると、いちいち説明しなくてはいけなのが煩わしいのか、由美は眉を潜めた。

「……華紅夜がそうさせたからよ」

「なに……？」

昇はまだ理解ができていない様子だった。観月の方を見て説明を求めるが、自分の口からは言えないといった様子で観月は顔を伏せ

た。

「解放期限の五十年が来る度に、華紅夜は罪を新たに犯して期間を延ばしていたのよ」

由美はそれを見兼ねて説明を付け加えた。それを聞いて、昇は信じられないといった表情で美保を見た。

「馬鹿なこと言わないで。百五十年も生きてるわけじゃないじゃない……」

美保もだんだん自分のことに自信がなくなってきたのか、語尾が弱々しくなっていた。

「そう思うのも無理ないわ。橋田美保は華紅夜の容れ物にすぎないから」

「「……っ!？」」

由美の突然の言葉に、昇と美保は固まってしまった。観月だけが悔しそうに握った拳にさらに力を入れていた。

それを一瞥しただけで、由美はさらに言葉を続けた。

「本来なら橋田美保という人物は別にいるの。そこに華紅夜という人物が入っているだけ」

わかった？ と昇の方を見てニコリと微笑むと、由美は一步前へ出て美保の手を掴んだ。

「さあ、もう迎えは来てるわ。行くわよ華紅夜」

由美がグイとその手を引っ張ると、美保は由美の隣へと誘われてしまった。

「昇……」

月の住人の不思議な力のせい、美保は抵抗が出来ずに目に涙を浮かべていた。由美は美保を引っ張りながら歩きます。

「ああ、それから」

由美はふと思い出したという仕種をして、振り返った。

「橋田美保の身体は返すわ。華紅夜が抜ければ人格は戻るから大丈夫よ」

不敵な笑みのままそうとだけ言うと、美保を連れて廊下の先の暗

闇へ消えてしまった。

昇と観月だけが取り残された夜の校舎内。紫色に輝く光が辺りを不気味に照らし出し、同時に二人の心情までもを表しているようだった。

「観月、知ってたのか？」

「……ごめん」

昇が力無く質問をすると、観月もまた力無くそうとだけ答えた。再び沈黙が漂う。

「なんで言わなかった？」

昇は観月の方を見ようとせず、ただただ力無く質問を続けた。観月は昇の顔を恐る恐る見つめて、なかなか口を開けないでいた。

「……ごめん」

やっと絞り出した答えは、先ほどと同じものだった。その態度が癪に障ったのか、昇は観月の両肩を掴んでそのまま壁に押し付けた。

「……っ」

突然の行動と痛みに観月は顔をしかめた。ふと昇の顔を見ると、観月は昇が怒ったのはそれが原因ではないとわかった。

「わるい……」

昇は肩を握った手の力を緩めると、ゆっくりとその場に膝をついた。観月は何も言うことが出来ずに、壁にもたれたまま昇を見下ろしていた。

またしても辺りに沈黙が訪れる。観月は唇を噛み締めながら、自分の所業を呪った。

「なあ、観月……」

ふいに、昇が俯いたままで話し掛けてきた。観月はなぜかわからないが驚いて、昇の頭を見つめた。

「美保を……取り戻せないのか……？」

「……っ！」

観月は予想もしていなかった昇の言葉に、驚きを隠せない表情を浮かべた。

昇はそのままの格好で言葉をぽつりぽつりと紡いだ。観月はただ黙って聞くだけだった。

「今の美保は……俺達と過ごしてきた美保は……消えちまうんだよな……？」

昇の言葉は語尾が弱々しく、声が震えていた。観月は拳を握りしめた。

「もう……美保には会えないんだよな……？」

観月は胸が締め付けられたかのような錯覚に陥った。自分は分かっていたつもりのことであったが、改めてその事実を耳にすると、なんと拭い難い焦燥感が観月の頭を襲った。

昇はそれ以降何も言わな区なり、観月はしばらく黙っていたが、やがてその口を開いた。

「……行こう」

「え……」

観月の言葉が意外だったのが、昇は反射的に顔を上げた。その双眸には濡れた跡が見て取れたが、観月にはむしろそれが心地好かった。

歯を出して笑顔になり、昇を諭すように続ける。

「月に戻るためには船が必要なんだ。その船はかなり大きいし、地球の人間には視認できてしまう」

突然観月が専門的なことを語りだしたので昇は戸惑ったが、すぐに内容を理解する。

「つまり、船のある場所はあるそこしかない」

観月は右手の人差し指を立てると、自分達の真上を指して自信ありげに言った。

「屋上だ」

「で、でも、さっき俺達がいた時にはそんなでかいもなかったぞ？」

昇はやつと喋れるまでに回復し、観月の話の中で気になったことを聞いた。

「それは……」

観月もそこだけは合点がいかなかったのか、考え込んでしまった。しかし、すぐに弾かれたように顔をあげた。

「そうだ！ 階段室の裏側にあつたんだ！」

「なるほど！」

昇も観月の説明に納得がいき、その表情に笑顔が覗いた。

浜平学園の屋上は前述した通り、かなり広い。全校舎の屋上を繋ぎ合わせて広大なスペースを確保したために、屋上へと続く階段室はなんとも中途半端な場所に出来てしまった。階段室の裏には水道タンクやガスタンクなどの機材が設置されており、生徒が近付くこともなくその興味を示されることもない。

「よし、さっそく行こう！」

観月が屋上へ向かおうと階段に入りかけたところで、昇に動きがないことに気付く。

「どうした、昇？」

観月は不思議そうに昇の顔を見た。その表情は、今までにないほどに真剣な眼差しで、何かを決意したかのような力強さがあつた。

昇は一度深呼吸をすると、真っ直ぐに観月を見据えた。

「なあ、観月——」

屋上の階段室の裏側、タンクなどの機材が大量に設置されているその数メートル上空に、巨大な船が浮いていた。

そのフォルムは潜水艦を彷彿とさせるもので、尻すぼみした楕円形であつた。

その側面の入口とおぼしき場所からは、地面へと光の階段が伸びていた。その階段へ促すための通路を作るように、スーツ姿にうさぎの被り物をした者達が蒼然と並んでいた。

「さあ、華紅夜」

美保は、背中を由美に優しく押されて体が一瞬震えた。この程度の人数なら自分だけでもどうにかなると踏んでいたが、それは甘かった。

由美に掴まれた腕を振りほどけなかったのは恐怖による威圧感などではなく、何か不思議な力によるものだとか先刻改めて感じた。

「そんなに怖がることないわ。時がくればあなたは華紅夜としての人格を思い出し、『橋田美保』であったことなどに忘れるわ」

由美はニコリと微笑んだが、その笑みは美保の恐怖心を煽るだけだった。声を出そうと思っても、うまく出すことができないでいる。

美保は、目頭が熱くなるのを感じて、今さらながら自分を情けなく思った。

「大丈夫よ。あなたの人格が変わっても世界では『なかった』ことになるから。ただ、翁魅君には影響がないわ。私達と接触してしまったものね」

由美はくすくすと薄気味悪く笑い出した。美保はギュッと目を閉じ、心の中でひたすら助けを求め叫んだ。

その刹那――

「美保！」

「……っ！」

突然の自分と呼ぶ、求めていた声を聞いて美保の表情の曇りが薄れた。

振り返り、声の主を探す。その姿はすぐに見つかった。美保は声が出なかったことなど忘れ、その名を呼んだ。

「昇！ 観月！」

「あら、早かったのね」

由美は相変わらずの不敵な笑みを崩さず、ゆっくりと昇と観月を見据えた。

「美保を返してもらおうぞ」

昇はあくまで強気に、由美に訴えるように告げた。しかし、由美の笑顔は絶えない。

「くすくすくす……」

それどころか、由美の笑みはどんどん気味の悪いものになっていく。昇は一瞬たじろいってしまった。

「ここまで来れたのは大したものよ。まあ、弓原看守官の入れ知恵かもしれないけど」

由美はどことなく妖艶で不気味な雰囲気をつつたまま、楽しそうに話している。昇達は、その様子が意味するものが理解出来ず呆然としていた。そして、由美の口から衝撃の一言が告げられた。

「……時間ね」

「……っあ!」

美保の身体が一瞬跳ね上がり、その場に力無く座り込む。月の紫色の明かりは輝きを増し、美保の姿を闇夜の中に鮮明に映し出していた。

辺りが黙って見守る中、美保が口を開いた。

「なんの騒ぎじゃ……?」

七、事の終結

「やれやれ。随分と待ちましたよ、華紅夜」

由美は美保――華紅夜に近付くなり、まるで旧友に語りかけるようにそう言った。

「ふん、貴様か。言っておくが妾を月に返すのは何度やっても不可能じゃ」

華紅夜は腫れ物に触るような面持ちで由美を一瞥してそう言い放った。対する由美は余裕の表情を浮かべていた。

「それはどうでしょうか？」

由美はそう言うなり右手を高らかに挙げた。それに反応し、周りの者達が昇を取り囲む。

「なっ……」

昇は突然の出来事に抵抗すら出来ず、あっさりと捕まってしまった。羽交い締めになれ、横から銃口を突き付けられる。

「お、おい……嘘だよな……？ 観月……」

昇は銃に怯えてすっかり引け腰になり、観月に助けを求めた。しかし周りの者達は観月よりも高官なのだろうか。観月は憎々しげに周りを見ているしか出来なかった。

「さあ、大人しく月に帰りましょう？ この者がどうなってもいいと言うのなら別ですが」

昇こそが由美の切り札だったのだろう。すっかり余裕の表情になり、華紅夜を促そうとした。しかし、華紅夜はそれを一蹴した。

「ふん、この程度……」

華紅夜がゆっくりと右手を前へ出す。辺りの空気がピンと張り詰めたかと思うと、次の瞬間少しだけ大気が震えた。

「な、何を……？」

由美は何をされたのか分からずに辺りを見回した。すると、昇を羽交い締めに使っていた者がフラリと倒れた。昇は解放されたが、銃

を向けていた者の方を反射的に見た。しかし、その者もいつの間にかその場に崩れていた。

「すげえ……」

昇は一言呟くと、改めて華紅夜の方へと目をやった。華紅夜は何とも言えない表情で昇を見つめていた。二人の間に、何やら不思議な空気が漂う。

昇は何となしに感じていた。美保とは違う感じこそすれ、華紅夜の雰囲気は以前に何度も感じたことがあると。

「お前はいつたい……」

昇が口を開いた瞬間、由美の怒号がその言葉を完全に掻き消した。「お前達い！ 何としても華紅夜を連れて帰るのよっ！」

その声に伴い、今度は一斉に華紅夜へと向かっていく。華紅夜は依然として余裕のある表情を浮かべていたが、途端に思い止まったようにその表情を崩していった。

「待った！」

華紅夜の凜とした声が辺りに響き渡る。昇も観月も、由美さえも聴き入るほどの綺麗で透き通った声だった。

「妾は……月に帰ろう……」

語尾が少し震えていたが、華紅夜は間違いなく『月に帰る』と自ら言った。その言葉に、周りの者達は皆、由美までも啞然としてしまった。

「……っ」

昇の胸につつかえていた何かが、不意に取れたような気がした。自分は分かっていた。美保に出会った時からではなく。もっと遥か昔から。

視界の隅では、今まさに華紅夜が由美に伴って船に乗り込むところだった。それを見た途端に、なんとも言えない焦燥感が昇の中に沸きだした。

「……を……えせ」

ポツリと、呟く。そして次は、その言葉を確かにはっきりと届け

るために息を大きく吸い込む。

「美保を返せ！」

「「……っ!？」」

辺りの者達は突然の怒号に身を震わせたが、それが昇のものだと分かるとすぐに余裕の表情に戻った。

「お前らじゃ……話にならねえだろうが……！」

昇は走り出した。華紅夜の——美保のいる船の入口目指して全力で足を動かす。

「き、貴様……っ」

すぐそばの三人が駆け寄ってきて昇の進路を断とうとしてきた。けれど、昇は止まることはなかった。

「どけえええ！」

「ひ……っ」

敵は昇の勢いに圧されて一瞬引いてしまった。昇はその一瞬の隙に潜り込む。

昇の体躯が相手よりも小さいためか、勢いだけでなんとなしに脇をすり抜けて行く。

「くっ……こいつ……」

一人が手を伸ばしてきたが昇は怯むことなく駆け抜ける。するとそれが発端となって周りの者は次々に絡み合い倒れていった。

昇はそれを後ろ目に確認すると、前方——美保の居る場所を見据えた。あと数歩、走れば届く距離だ。

「ちっ……使えない奴らね」

由美は憎々しげにそう吐き捨てると、美保——もとい華紅夜の方を見た。

「行くわよ。いつまでも居られないわ」

「……ああ」

華紅夜は何かを懸念する表情を浮かべながらも由美の言葉に頷いた。

「させねえ！」

「……っ！」

いつの間にたどり着いていたのだろうか、昇が華紅夜の腕を掴んだ。由美も華紅夜も呆氣に取られ、昇は華紅夜を引っ張り由美から距離を取った。

「翁魅君、あなた……」

「分かってるさ！」

由美がなにやら文句を漏らしかけたが、昇の声がそれを掻き消す。それが気に入らなかったのか、由美の表情が険しいものになっていく。

「華紅夜は罪人なのよ！？ 助けられる立場じゃないの！」

「立場の問題じゃねえ！」

「だいたい華紅夜は月の住人なの！ 地球に留める意味もないでしょう！？」

「意味なんかどうだっていいんだよ！」

「あなた……自分のしてることの重罪さ分かってるの！？」

「分かってる！」

「……っ」

昇の解答に由美は押し黙ってしまった。二人は険しい表情で睨み合う。

「はぁ……」

その均衡を先に破ったのは由美だった。腰に手をあてて頭を垂れる。

「翁魅君、あなたは どうして そうなの……？」

昇は自分が何を聞かれているのか分からなかった。ただ由美の言葉がそこらじゅうに響き渡るのみだ。

「あなたは……」

「お前ら何してる！？」

由美の言葉を遮って年配の男性の声が響いた。声のした方を向くと、警備員のおじさんが懐中電灯片手にこちらを見ていた。どうやら大きな船と明かりで見つかったらしい。

「……っ。今よ！」

由美の声を火蓋にしてウサギの面を被った者達が警備員に向かって走り出す。いっきに取り囲むと、数秒の沈黙の後に彼らは走って船に入って行った。

彼らが離れた場所では、何が起きたのだろうか警備員が横たわっていた。

「……っ。しまった」

昇がそれに目を奪われているうちに、由美は美保を連れて船に乗り込んでしまった。

「邪魔だ！」

ウサギの面を被った者の一人に突き飛ばされ、昇はその場に尻餅をついた。

「み、美保！」

強く腰を打ったせいしか立ち上がれず、昇はその場で悲痛に叫んだ。船の中では美保が何やら叫んでいるが、ガラスが厚いのもあってこちら側には聞こえなかった。

大きな音を立てながら、船が浮かぶ。月では技術が発展しているのか、ロケット装置などは見られず重力に逆らってただ浮いているようであった。

「美保……」

昇の聲がだんだんとひ弱になっていく。その隣では、観月がただ黙って立ち尽くすだけであった。

突然、船の底が開いてスピーカーのようなものが出現してきた。スピーカーは昇と観月に向けられている。そこから由美の聲が響いた。

『弓原監視官、貴方には別途特秘指令を後ほど通達するので待機しなさい。翁魅君』

由美に名前を呼ばれた途端に、昇の顔が緊張した。そんなことは尻目に、由美の言葉は続けられる。

『華紅夜のこともいずれ貴方は忘れるわ。辛いのは今だけと分かっ

てちょうだい』

昇は心をごっそり持っていかれたような感覚に陥った。美保とはもう会えない。その現実だけが昇を押し潰してしまいそうなほど彼に重くのしかかっていた。

二人が反応をしないまましているとスピーカーは速やかに船底に収納され、船は徐々に上昇をはじめた。

「昇……ごめん……」

観月がポツリと呟いた。昇は黙って首を横に振ると、じっと船の行く末を見つめた。

観月は屋上に上がる前、昇との会話を思い出していた。

「なあ、観月」

昇は今までにないくらい真剣な眼差しで観月を見つめた。

「……？」

観月は昇が何を言わんとしているのかよく分からずに、次の言葉を待った。昇は静かに、一言一言を丁寧に伝えた。

「俺はやっぱり……美保のことが好きだ」

それを聞くと、観月は安心したような表情を浮かべた。昇はそれを見て少し不思議そうに観月を見た。

「キャラじゃないのは分かってるけど微妙な顔すんなよ」

少し拗ねたように言うと、観月はフツと口元を緩めて言葉を出した。

「知ってたよ、そんなこと。ずっと前から」

もう夜空に消え入りそうな船を食い入るように見つめ、昇は動こうとしなかった。観月の中では申し訳なさが溢れ出す。

どうして自分は止められなかったのか。どうして昇を傷つけてしまったのか。どうして美保が傷ついてしまったのか。どうして自分はこんなにも悔やんでいるのだろうか。

観月がそんなことを考えていると、昇はスッと立ち上がり観月を見た。なんだか吹っ切れたような、すっきりした面持ちであった。

「観月、帰ろう」

笑顔でそう言うと、昇は警備員を担いで階段室へと消えていった。観月は拭い切れない思いを抱いたまま、昇の後を追った。

空には星が瞬いていたが、紫色の光も、月さえもがその存在を消してしまっていた。

僕とかぐや姫

木々の葉も紅く染まりはじめ、夏の喧騒はどこへやら涼しい風の吹く季節となった。夏休み明けの試験も終わり、一旦落ち着きを見せた秋模様の学校はどこか寂しげだった。

翁魅昇は、そんな校舎を誰も居ない放課後の屋上から見据えていた。

夏のあの日。自分の知らないことばかりが立て続けに起こってついには自分の大切な人までも失った日。由美の話では次第に記憶から消えていくらしいが、昇の頭には鮮明にその出来事が記憶されていた。

「昇、ここに居たのか」

ふと、背後から声をかけられた。振り返らないでも分かる。観月だ。

観月はあのあとずっと地球に残り、月からの指令で警備員や校舎の損壊に関する後処理を請け負っていた。

「なあ、観月。俺はいつ忘れるのかな……？」

もう何度同じ質問をしたのか分からない。けれど、昇は不安と焦燥から聞かずにはいられなかった。

「分からない。ここ何日か月とも連絡が取れなくて。でも、警備員の記憶は消えたし、時間の問題かな……」

「……そっか」

二人で並んでフェンスに寄り掛かり、秋空を見上げる。今ではすっかり日も短くなり、下校時間前のこの時間でもすでに辺りは暗くなっていた。

「昇は、早く忘れない？」

「……………」

唐突に聞かれて、言葉に迷った。いつか自然と忘れるものだと思っていたせいか、自分の意志として考えたことはなかったからだ。

けれど、聞かれてみると自分でも驚くほどにあっさりと答えは見つかった。

「俺は、忘れたくないな」

笑顔を浮かべて、観月にそう言う。観月は、どうしてか知りたそうな表情を浮かべた。

「たとえ会えなくなっても、美保は俺にとって本当に大きな存在だったんだ。その事実は変わらないし、美保は実際に俺達と過ごしてきたんだよ」

少し照れ臭そうに言う昇に、観月も思わず笑みを浮かべた。昇はさらに頬を紅く染めて続けた。

「それにさ、最近よく夢を見るんだよ」

「夢？」

「うん、なんだか暗くて広い空間に一人ぼっちでさ。どれだけ足掻いても何もできなくて。でも、最後には必ず観月や美保が手を伸ばしてくれる。だから俺は信じてるんだ」

「……？」

昇の言わんとしていることがいまいちよく分からずに、観月は首をかしげた。そんな観月を見て、笑いながら昇は自信満々に言った。

「たとえ離れても、俺達は繋がってるんだって」

言ってから、昇は恥ずかしそうに頭を掻いた。それを見て観月が微笑む。そこで、観月は思い出したように言った。

「今日は昇に言わなきゃいけないことが出来たんだ」

「え……？」

少し深刻そうに、でもどこことなく嬉しそうな観月の表情に、昇は不安な気持ちになった。

「実は——」

観月が何か言いかけたところで、いきなり突風が吹く。あまりの強さにしばらく目を開けられないでいた。

「う……」

風が止んだのを感じ取ると、ゆっくりと目を開ける。するとそこ

には、驚くべき光景が広がっていた。

「観月……あれは……」

「……………」

昇が呟くと、観月は黙って頷いた。その顔は微笑を浮かべており、紫色の月明かりに照らされていた。

「——美保が帰ってくる」

「……………」

その言葉を聞いた途端、昇は腰が抜けてしまった。その場に座り込んで俯く。観月は説明を続けた。

「今回の執行期間はあまりに大人しかったからってことで、仮釈放になったんだ。その間に地球に旅行だってさ」

「……………」

昇は嬉しさと綻んでいた表情が一気に硬直するのを感じた。観月を見上げるが、至って平然な様子だ。

「な、なあ……仮釈放ってことは、ずっと地球に居るわけじゃないのか……？」

「まあ、そういうことになるのかな」

平然とそう言われ、昇は硬いアスファルトの地面を思い切り叩いた。神はどうしてこうも飴と鞭を使い分けるのか。その理不尽さが、たまらなく悔しかった。

「あんた何してんの？」

「……………」

不意に、誰かに話し掛けられた。昇はすぐに声の主を理解すると、顔を上げる。

「美保……」

「久しぶり！」

美保はいつもと変わらない様子で笑って手を振った。観月は昇の肩を叩いて呟いた。

「せっかく会えたんだから、笑顔で居てやろう」

その言葉に、昇は泣き崩れそうになった。

そうだった。自分は自分なりに答えを出したじゃないか。美保を笑って迎えて笑って送るのがそれに従える一番の方法じゃないのか。昇は口元を緩めると、フツと笑って美保を見据えた。そして、言葉を紡ぐ。

「おかえり、美——」

「何が起きたのか分からなかった。自分は美保と密着、というより美保が自分に抱き着いてきていた。そして美保の唇は自分のそれに重ねられている。」

勢い余って後ろに転び、そこで美保も昇から離れた。頬が紅潮しており、そして、見慣れた満面の笑みを浮かべている。

「あーあ……また刑期が延びたね……」

観月が苦笑いを浮かべながら呟いた。

「観月、それってどういうことだ……?」

昇は観月の言ったことがよく分からず、眉根を寄せた。

「言わなかったっけ? 華紅夜の罪は地球人との不純異性交遊だった」

「へ……」

「美保、どこかで由美も見てるの分かってやったな?」

「なんのことかしら?」

観月の言葉に美保は楽しそうに笑うと、昇の方に向き直って言った。

「私ね、月で何回か華紅夜とお話したの。華紅夜にはずっと昔から地球に想い人がいて、その人の生まれ変わりを追ってずっと地球に留まったんだって」

「それって……」

昇が何を言おうとしたのか分かったのか、美保は頷いて話を続ける。

「今回は運命だったのかな。華紅夜と華紅夜の器に選ばれた私。その二人の想い人が一緒だったなんて」

美保は照れ臭そうに笑って、真つすぐに昇を見つめた。

「これからも、ずっと一緒に居ようね」

「ああ、ずっと――」

「やれやれ、お熱いことで」

三人で笑い合う。怪しく、しかし三人を祝福するかのようにならびやかに紫色に光輝く月の下で。もう離れることはない、永遠を噛み締めながら、三人は歩んでいく。

昔、竹取の翁という者がいた。彼はある日竹林で一人の少女を拾う。彼女は大変大切に育てられたが、本当は月の罪人であり、月に帰る日が来た。

その数百年後、翁の子孫に会うために少女は地球を訪れ、二人は恋に落ちる。しかし刑期が過ぎれば彼女は月に帰らなくてはならない。

そこで彼女は考えた。罪を繰り返せばいいと。

そして何度も繰り返された時を越える恋。今、一人の少年がそれを手にした。名を翁魅昇。かぐや姫と翁の絆は、時を越えて強く結

F
i
n

ばれていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1998q/>

僕とかぐや姫

2011年8月20日03時14分発行